

小學日本文典

大槻修三著

下

810.
0934s



244897

小學日本文典卷之下

東京

大槻修二

著

言語篇下

形状言

形言カタコトも物事モノコトの形容ナリカタと有様アリサマとを云ふ者ウタハシよりて高タカシ速樂トホレタシ悲カナシの類タガヒなり

大の言葉コトバの働ハたらきえサ行ギヤウりてサシサシと動ウツき力行ギキウも更サラも働ハたらうぬ者ヌモノなり

サ行サとカ行カとよ移ウツりて言葉コトバの切キりと續ツくと

小日本文典 卷之下

の四轉あり

第一轉 其有様を云ひ切る者

第二轉 云ひ据ゑて其有様を示る者にして

事名となる

第三轉 名詞に付きて連體言となる者

第四轉 動詞に續きて連用言となる者

但、六の連體連用と云ふことは、装詞の處に記せり

○第一轉

長し ナガ

寒し サム

白し シロ

悪し ア

久し ヒサ

美し ウツク

六のシの字をナカ、サム、シロ等の言葉に添へて其有様を云ひ切る者なりはれとアシ、ヒサシ、ウツクシ等を其言葉の持前より素よりシの音あれもアシ、ヒサシ、ウツクシへと云をせずして一のシの字を省きて用ゐるべし即ち略音の格なり其二轉以下もシサシキ

シクとシの字を加へて用ゐる者なり但俗言をアシ、久シ、と云ひ又ウツクシイとも訛れり
○第二轉

近チカさ

薄ウスさ

重オモさ

嬉ウレシさ

精スミさ

惜ウレシさ

第三轉

堅カタき石イシ

直ナホき道ミチ

新アタラシき年トシ

勇イサマシき心ココロ

俗言よを此キをイヌ訛りてカタイ石、アタラシイ年と云ふ

第四轉

早ハヤく行ユく

輕カルく上アガる

空ムナシく待マつ

宜ヨロシく頼タノむ

俗言よを此クをウヌ訛りてハヤウ、ヨロシ

ウ杯と呼べり

六の形言を上よも云へる如く有の働きを結ひ
付けて四段別格の用言となる者なり
六の結ひ付く様も文字篇なる約言の格にて第
四轉よりアリの動詞は結び付けぬクアの約と
心得へし

安ヤスのゝず

清キヨのゝど

怪アヤシのゝで

浅アサのゝり

闇クラのゝり

嶮ケバシのゝり

深フカのゝり

全マツタのゝり

悔クヤシのゝり

短ミジカのゝれど

勇イサメシのゝれど

羨ウラヤマシのゝれど

貴タフトのゝれ

勿ナのゝれ

正タシのゝれ

六の有の働は移り變る者を用言第一轉より六
轉まで四段別格と同じせれども七轉の如く六
のへきをケレと變じ八轉を又本言の如くカレ
と云ひ棄て、願ひ仰ぎる言葉となるなり

但第三轉なる四種の働きを用ゐらるゝをいふ

脚結言

脚言とて言葉續きの終りより居りて上より來る意を結ぶ者なり
此詞も有と無とを云ひ示し又過去と現在と未來との時刻を云ひ定むる者なり
此の言葉の働き動くことを用言形言と同じはれども又全く異なる者あり其處を云ふへし

別は無轉の脚言あり未と出せり
此詞を十種に分てり

○第一種

用言四段ノ變格なるアリの用言をれども第三轉を用ゐることなし
即ち セリ ナリ ガリ シリ ケリ
タリの六言にてセナガタケメと呼ぶ

行くなうん

歸るなうん

與アタふるなり

送オクるなり

違タカふなる路ミチ

讀ヨむなる書フミ

取トるなれど

住スむなれど

右の如く用言ヨウゲンの第六轉を受くる者なりおれ
ニテアリの約ヨクたる者と知るべし

君キミなもん

花ハナなもんぞ

是コレなり

水ミヅなり

東ヒカシなる山ヤマ

直スグなる心ココロ

人ヒトなれど

我ワレなれど

右の如く名詞を受くるもニアリの約言

云イひたるを

解トけたもん

悟りたり

進みたり

死むたる人

育てたる子

申したれど

名のりたれど

右の如く用言第二轉を受けし過去を云ひ示す者即ちテアリの約

君たれど

人たれど

父たり

子たり

親たる道

民たる務

神たれど

道たれど

右の如く名詞を受くるもトアリの約

云むる人

受けざる人

聞キのぎり

起オまぎり

着キざろ衣コロモ

逢アまぎる友トモ

居ヲらざれど

棄スてざれど

右も用言第一轉を受く即ちズアリの約言よして打消して無くする者

仰オせろり

過スまぎり

名ナ乗ノり々時トキ

誇ホり々功イサヲ

忍シび々れど

答コへ々れど

右も第二轉を受く即ち過去のキよアリの結ひ付きたる者

殿ト造ヅせり

宮ミヤ仕ツカヒせり

冬フユ籠コモリせる人ヒト

圓マ居トせる夜ヨ

眺ナカせれと

紅葉モミダせれと

右も第三轉を受くる者にてシアリの約ヨクをれ
も亦過去タコを示シす者なり

云イふめり

騒サワぐめり

靡ナヒくめり旗ハタ

流ナガるめり紅葉モミダ

放ハナつめれと

語カゴらふめれと

右も第五轉を受くミエアリの約ヨク言ゲンよりて現
在ガイ見ミゆる大とを示シす者なり

以上のケリ、セリ、メリの三言をケラシ、セラハ、メ
ラス、など、第一轉ダイ働ドウくことなし、但しセラシ、
ケラズも稀ヒニ用モクゆるふとあり
又第八轉ハチなる仰オウする言葉コトバニ用モクゆる者をザレの
一語のみ

○第二種

物事を消ケし無ナくするの意イにて打消ウチケシ言葉コトバ
とも云ふへし即ちズジヌネとマジ、マジ

ク、マジギの兩語も分る

住スまず

聞キあじ

知シらぬ人ヒト

思オモをねど

右も第一轉を受く但しズも云ひ切る言葉も
てジも同意ながら用ぬ處少しく異なり又を
用言の五轉六轉も同じくネも第七轉も同じ

云イふまじ

答コタふまじ

受ウらまじキ物モノ連連

恨ウラむまじキ思オモふ連

右も第五轉を受けて其働きを形言も同じ但
し其二轉のサを用みず

○第三種

過去を云ひ示し言葉をもちり即ちキシ
シカ 又ヌルヌレ ツツルツレの三語
なり

語カタりキ

助タスけし人ヒト

試ココロみしあぢ

キを切^キる、詞^{コトバ}にてシを上の又よ同じく連體^{レンタイ}言^{ゲン}をりシカを上^ウのネよ同じ

盡^ツまぬ 重^{カサ}ねぬ罪^{ツミ} 知^シりぬれを

返^{カヘ}しつ 分^ワけつ道^{ミチ} 留^{トク}めつれど

右三語を共^ニ第二轉を受^ウく但^タし又ヌルを自^ジ然^{ゼン}言^{ゲン}を受けツツルを使^シ然^{ゼン}言^{ゲン}を受^ウく
自然^{ゼン}使^シ然^{ゼン}の差別^{シヤベツ}を文章^{ブンシヤウ}篇^{ヘン}よ云^イふへし
○第四種

未^ミ定^{テイ}を推^オし量^{リカ}る言^{コトバ}葉^ハよして治^チ定^{テイ}せぬ意^イ
を^シ示^シせり即^スちンメとマシ、マク、マシカと
の二語^{ニゴ}をり共^ニ用^{ヨウ}言^{ゲン}第一轉を受^ウく

語^{カタ}らん 聞^キのめど

去^キのンを名^ナ詞^ジよも付^ツきて登^{ノボ}らん山^{ヤマ}泛^ハづん舟^{フネ}
な^ナど用^{ヨウ}あ^アるこ^コと^トあ^アり
又^マ打^ウらんず 罷^オらんむ^ム時^{トキ} 給^タらんむ^ムれ^レむ
な^ナど云^イふ^フ去^キと^トあ^アり
又^マラケナテの四字^{シジ}を上^ウよ冠^カん^ンらせて種^{シユ}々^クの意^イ

を示せり共ニシメト同じき働きをなせり其
意の異なるを其言葉の下ニ出せり

思ふらん

知るらん

第五轉を受けて未來
を押し量る意

尋ねらん

留めらん

過去を押し量る意
以下共ニ轉を受く

返してん

折りてめど

願ひてかゝりたしと
云ふ意

隠れらん

絶えらん

過去を疑ひてかゝり
しらんの意

おのナンヨもテニヲハの處ニ兩種ありはれ
どそれをもメと轉らぬ言葉なり

聞ひまし

見まらむ

欲まらむ 云をまし

おのマシもンと同じく切るとき時と名詞ニ付
く時と兩様なりマクも用言ニ續く詞マシカ
も第三種のシカも同じし何れも未來を示す言
葉にてンメも同じき意なり

○第五種

おの言葉共も然せしむる者と然せしむる

者^モと^リて使^シ然^ゼ言^ハ被^レ然^ゼ言^ハと分^カて^リ終^スへ
て用^{ヨウ}言^{ゲン}の第^一轉^ヲを受^ケと^ル者^トハ
セ^ス サ^セサ^ス シ^メシ^ムの三^種を使^ハ
然^ラ言^ハと^ス

レ^ル ラ^レラ^ルの兩^種を被^レ然^ゼ言^ハと^ス
共^ニ用^{ヨウ}言^{ゲン}の^下二^段又^同し

笑^{ワラ}を^セん

押^オさ^せて

語^{カタ}ら^せな^さす

云^イな^す

咲^サの^する^花

住^スま^すれ^ば

咄^{ハナ}せ^よ

右^ニえ^四段^ノの用^{ヨウ}言^{ゲン}を受^ケと^ル但^タし^この^スル[、]ス^レを
俗^ノ言^ハも^セル[、]セ^レと^云ふ

答^{コタ}へ^させ^ば

懲^コり^させ^て

來^{キタ}さ^す

着^キさ^する^衣

見^ミさ^すれ^ば

勸^{ス、}め^させ^よ

右二段と一言との用言を受くおのスルスレも俗言ゴダシよえセルセレとす

取トら志シめん 伺ウカミを志シめたり

率ヒキおシむ 乘ウマら志シむ馬 得ウケ志シおれを

助タスけ志シめよ

右を総べての用言を受く又サシメ、サシムとサ文字モジを添ツふることも有るなり

以上使然言シヤゼンゲン

引ヒおれを 恵メダまれたり 慕シタをも

進ス、まも心ココロ 防マモおれを 返カヘられよ

右を四段の用言を受く俗言ゴダシよえセルレレと云ふ

建タテられん 居ヲられて 妨サマげらる

見ミらる心ココロ 寐ネられを 清キヨめられよ

右を二段と一言との用言を受と俗ヲモラレル
ラレレと云ふなり

以上被然言

此使然被然の兩語も互ニ受と續きて種々の言
葉遣ひとなることなり

云イもコせコるコ 懲コりコせコるコ 越コきコめコるコ

取トられトむ 行ユわれユます

右の如く結び付きて各種の意を示す者なり

○第六種

此言葉共敬語と云ひて人を尊敬する
時ニ用みらる者なり

オハス マス タマフ等の言葉なり

久ヒサくヒサおヒサをヒサせヒサず 思オモひオモおオモをオモせオモん

暫シバしシバおシバをシバしシバつシバる 今イマ朝イマおイマをイマしイマたイマる

悦ヨロコびヨロコおヨロコをヨロコまヨロコす 聞キきキおキをキまキす

おもしろ可カき

おもしろカい

かとおもしろトる處

見おもしろトする時

幼コとおもしろサれど

行ユきおもしろレど

ととおもしろセよ

教ヲへおもしろセよ

夫の言葉を一言用言のセシスと同じき働ハき
りて用言を第二轉を受け形言ハ四轉を受ケく

おもしろカまシたシだ

答コへマさシす

云イひマあリけリ

届トけマあリけリ

存ゾんマさシす

咄ハしマさシす

伺ウかヒまスす心

疑ウたガひマさシす事

知シりマさシたシだ

諭サしマさシたシだ

心得ませ

静りませ

右も四段の用言なるも又三音一言の用言なるも少しく異なるも働きさすをれども自他の違ひをわらじ

行きますせむ

動きますせん

聞きました

覺へました

承知します

申します

知ります事

交ります人

存しますれど

行きますれど

入りますせよ

考へませよ

右の如く上のオハセ、オハシ、オハスと同じ働きまする総べてを第二轉より受らるる定まり

なりよ又次の如く第一轉より受とることを

阿らませむ

知らませむ

右の如くアリシリより受けむしてアラシラ
より連るおとらまはれとマセバの言葉は限
る如く思ふる

知りたまへん

教へたまへん

説きたまひて

承知したまひたり

歸りたまふ

宣うたまふ

交りたまふ友

乗りたまふ馬

行きたまへん

心得たまへん

進きたまへ

云ひたまへ

右も四段の用言なり常^{ツネ}に給ふ又玉^{タマ}へなどの
文字^{モジ}を用^{もち}ぬる者なり

上の脚言^{ケクゲン}の外^{ホカ}も常^{ツネ}に敬語^{ケイゴ}を用^{もち}ぬる者なり

下され

下さる

右も四段の用言なりクタルの言葉^{コトバ}も上の
被^ヒ然^{ゼン}言^{ゲン}なるルレの添^ツふる者

遊むせ

遊ぶす

右も四段の用言^{ヨウゲン}なりアソブ^{アソブ}も上の使^シ然^{ゼン}言^{ゲン}の

スセの添^ツふる者

又上の使^シ然^{ゼン}言^{ゲン}被^ヒ然^{ゼン}言^{ゲン}よセ又^{マタ}もサセを添^ツへて敬^{ケイ}

語^ゴとま^まることあり

セサセ セサス サセシメ サセシム

セラレ セラル サセラレ サセラル

右の言葉^{コトバ}の用^{もち}ぬる様^{サマ}も常^{ツネ}の下^{シモ}二^ニ段^{ダン}用^{ヨウ}言^{ゲン}にて即^チち

上の使^シ然^{ゼン}被^ヒ然^{ゼン}も同^{オナ}じ

○第七種

此言葉^{コトバ}も上の作用^{サヨウ}言^{ゲン}の處^{トコロ}に云^イひ置^マきた
る如^ドくセシスの用^{ヨウ}言^{ゲン}も字^ジ音^{オン}を添^ツひて用^{ヨウ}

言ハ轉を為すと云ひし者なり

周旋せむ

得心せず

議論せん

拜借志なき

決しのぬ

本望志遂る

用心したり

符合して

加減しぬ

存し書

達し状

察し心

問答す

通達す

改正す

都合なき時

往來なき道

退散なきまで

當惑なきも

満足なきも

返濟せよ

總て字音を直し用言し用みたる必ふの三音
一言なりセシスの用言を添ふ者すとす又存

す、通ず、感ずなどの如き濁音も共よ同じ又上の被然言使然言は連るハ常の如く第一轉のセより受く又得心させ警固さす杯の如く直又受くるも何ぞ

○第八種

おの脚言も斯く何なるんと察する意のラシラシキラシクと斯くあれと願ふ意のタシタキタクとの兩語を又ハシハシキハシクの言葉なり

男らし

女らし

嘘らしき

誠らしき

右も名詞より受とる者なり又云うらら杯と動詞より受とるも何ぞ

願ひた

愛で

伺ひた

見た

右を用言の第二轉を受とる者なり

忌イマをシ

疑ウタガをシ

歎ナゲカをシ人ヒト

似付ニツクをシと思ヲモふ

右の言葉をラシの類ルキにて斯カくシらシと
少コく疑ウタガふ意イらシと総スベて用言の第一轉を受ウく
又ガハシとカマシとの脚言キヤクゲンらシ共トモに名詞を受ウく

猥ミダリのシ

徒イタツラのシ事コト

嗚呼ウがコまシ

厚アツのシ人ヒト

意見イケンがコまシ思ヲモふ

右のハシ以下ハ何れナニの言葉コトバも付ツき添ソふる者モノよりらシびオツカ自らモチ其用ナの慣ナれし言葉ありて清セイ濁ダクも其言葉コトバに依ヨれり

○第九種

此種類シノビを如可ゴカの二文字ニモジにてコトコトシシもカれレとオチ同トじキ様ヤウに思ヲモふ意イなり又マへ

小 納本 巻一 下

シス斯とあるならんと未來を定むる意

なり

行く如し

悔ゆる如き思

瀧の如と落つ

右は用言の第六轉を受く又上はガ文字を添へて寫すが如し 棄つるが如き 見るの如くとも云ふなり

來可し

聞と可き咄

求む可と思ふ

右は用言の第五轉を受く

此兩語を形狀言の働きをれども第二轉なるサ文字を添へて用ゐるおとなし

○第十種

此言葉を書狀中は用ゐるサウラフと咄し言葉は遣ふゴサルとの兩語をり共は四段の用言にして元を敬語なるが今ハ惟アルと云ふ言葉の意味をて書狀中はも御坐候と連ねて書くこと常は多し

左様な候ふ

如何な候をん

申上候ウケうウて

仰せ候ウケひウたる

御坐候ウケ

仕候ウケ

存ウケし候ウふ時トキ

心得居ウケり候ウ事コト

相考申候ウケへウども

致候ウケへウを

左様ウケ心得候ウへ

扣ウケへ居ウり候ウへ

右ウケの如ウくハ行四段ウの用言ウヲて八轉ウの働ウき様ウ
共ウケも同ウじ
但ウケし言葉ウの元ウをサムラフウぢウガサウラフウと
ぢウり又ウソウロフウと訛ウりて今ウを直ウスウソロウとの
みも云ウへり
又次ウのウコサルウモラ行四段ウの働ウきウヨウて切ウれ續ウ
きウとも共ウケも同ウじ

心得御坐ウケらウぬ

覺御坐ウケらウぬ

別録

御坐り申さす

御坐ります

左様で御坐る

承知て御坐る事

懇意て御坐る人

覺悟て御坐れども

○無轉の脚言

無轉とも上よ記せる脚言の用言形言の如く段

を述ひ行を替へて種々の働きをなす者あらば
即ちカナとカシとの兩語にて総べての言葉の
下は戻りて夫れより其言葉を終れり故は脚結
の言葉なるハ素よの明らなり此れども上の言葉
共と全と異りて更なる動らねども別は無轉の脚
言として此より附せり

裝詞

裝詞を総へての言葉又副ちりて其有様と仕技
 とを現し示す者なりおれを二つに分てり
 連體言 即ち名詞又付き連る者なり
 連用言 即ち動詞又續き連る者なり
 左の言葉も其語の儘よて直に名詞と動詞とよ
 連る者も甚ど少し作用言の第二轉第六轉と形
 狀言の第三轉第四轉と又種々の言葉よ二、ナル
 テの辭を添へて此裝詞となるおれを七種よ分
 てり

第一 元來の裝詞

第二 作用言

第三 形狀言

第四 二ナルを添ふる者

第五 テを添ふる者

第六 同語の重なる者

第七 呼び懸くる者

右七種の内よ第二第三を上よ記せる者なれと
 種類を辨別せしめん為めよ再び其例を擧ぐ

○第一種

或人 アル ヒト 初春 ハツ ハル 諸手 モロ テ 小男 コ ヲトコ

大童 オホ ワラハ 一言 ヒト コト 百世 モ、 ヨ 千年 チ トセ

右も連體言

皆同じ ミナ ヲナ 必行ふ カナラシイコト 又逢ふ マタ ア 且聞く カッ

尚甚し ナホ ハナシ 唯見る タゞ ミ 斯云ふ カク イ 然定む シカ サダ

右も連用言

○ 茅二種

知人 シリ ヒト 植樹 ウエ キ 讀本 ヨミ ホン 用言の茅三轉

流る水 ナガ ミヅ 歩く人 アル ヒト 似る顔 ニ カホ 用言の茅六轉

右連體言

打守る ウチ マモ 相謀る アヒ ハカ 差向く サシ ム 用言の茅三轉

引受く ヒキ ウ 取扱ふ トリ アツカ

右連用言

大の第二種も既^{スデ}に作用言^{サヨウゴン}の處^{トコロ}に詳^{ツマビラ}かたり

○第三種

高山^{タカヤマ}

同じ心^{オナココロ}

永^{ナガ}き日^ヒ

烈^{ハゲ}き雨^{アメ}

右連體言

清^{キヨ}く澄^{ソウ}む

久^{ヒサ}く交^{マカ}る

右連用言

大の種^{シユ}の言葉^{コトバ}も形^{カタ}状^{ザウ}言^{ゴン}の處^{トコロ}に精^{クム}し但^シし高^{タカ}同^{ドウ}じ
の名詞^{メイジ}に連^{ツラ}る様^{サマ}も即^{スグ}ち装^{サウ}詞^ジの本^{ホン}色^{シキ}にして第^{ダイ}一^{イチ}
種^{シユ}に屬^{ゾク}をべき者^{モノ}なれども暫^{シブ}らく類^{ルイ}語^ゴの縁^{エリ}に因^ユ
りて此^コ處^{トコロ}に又^{マタ}出^イせり

○第四種

大の種^{シユ}の言葉^{コトバ}も細^{コメ}カ、平^{ヒラ}ラカ、華^{ハナ}ヤカ等^{トウ}に
してノとナルとを添^ツふれも連^レ體^{タイ}言^{ゴン}とな
りニを添^ツふる時^{トキ}も連^レ用^{ヨウ}言^{ゴン}とな

圓マドの月ツキ

安ヤスらのなる世ヨ

濃コメやのなる花ハナ

右連體言

長閑ノロガハルと晴ハル

高タカらのに讀ヨむ

明アキらのに見ミる

右連用言

又右の言葉遣コトバツガひと同じ様さまなる言葉コトバのり

更サラ

既スデ

遂ツヒ

誠マコト

妄ミダリ

徒イタツラ

懇ネニコロ

專モハラ

互タガヒ

為タシ

儘マ、

故ユエ

每ゴト

頓トミ

疾ハシク

右の言葉もノとナルとを添ソフふれも連體言と
なりニを添ソフふれも連用言となりおと上ウ又同
し但し言葉の勢イキホヒの司オナじうらぬ又因ヨりて別ツク
分ワてり

○第五種

おの装詞も用言の第二轉よりテと受ウケけ

て連用言となる者なり

始シて知シる

由ヨリて分ワカる

却カヘリて好ヨし

総スベて同オナじ

重カサネて逢アふ

極キハメて早ハヤし

増マシて況イシや

責セノて明日アスまで

尋タツネて來クる

右の如き類も其本語を作用言とす又用言ならぬも同じ様なる者あり

敢アヒて

嘗カツて

豫カネて

聽ヤガて

扱サて

右等の言葉も上と同じく言葉なれども用言より來れる者よりならず

○第六種

あの種の言葉も同じ言葉の二つ重りたる者にて亦連用言となる者なり

適タマタマ逢マふ

倩ツラツラ考カンふ

各オノオノ守マモる

屢來ルカマシキタ

愈堅イヨイヨカタ

抑多ノモソモオホ

旁行カマシタマハナ

殆近ホトホトナカ

態送ワザロサ オク

交代コトコロカハ

吳頼シレケレタラ

此外コトバも時々トキトキ處々トコロトコロなどの言葉コトバを二つ重カサりたる者モノの尤モトも著トクしき用モチひ様サマなり

○第七種

去オホの言葉コトバを驚オドロく時トキ又またも歎ナガく時トキなどオホ自オホ

ら出イづる者モノして物モノを呼ヨび懸カとらぶが如コトく用モチひる言葉コトバなり

ヤ 呼ヨび出イす言葉コトバして俗言コトバヤア又またもヤイ

と云イへり

ア、歎ナガく時トキ驚オドロく時トキアアアラ、アレオドロなども同ドウし

オ、心ココロも答コタふる時トキ驚オドロく時トキをオドロして俗言コトバオヤ

又またもオ、オ、と重カサねても云イふことあり

ウ、心ココロようなづと時トキ又また危ヤブしと思オモふ時トキ又また俗ゾク

もウンといふ

右ミダの外ホカもエ、イ、などあり共トモに驚オドロく時トキ又また

もうなづくと時、呼び出る者なり又イザイデ
サアなづい人を誘ふ時、用ゐる者も有り
六の第七種の装詞を連體言も連用言も何
らず総べての言葉の上も下も有りて心の
様を装ひ示す者なり

テニヲハ

六の辭とて見テ聞テ彼ニ此三筆ヲ紙ヲ君ハ我
ハの如く総べての言葉の下に添ひて其言葉の
意を定むる者なり必言葉と言葉との間、居り
上の意を承けて下の言葉に接ぐ者とす故に又
承接言とも云ふ

六のテニヲハは言葉遣ひの最も肝要なる者
しておれなければ縦令千萬の言葉を並ぶると
も決して其意を通じること能はず
辭の數も三十字ぐり有り分ちて三種と云

○第一種

おの辭テニヨハも名詞メイシを承ウけて下ハ動詞ドウシニ接ツと
者モとす故ユに上ウニ名詞メイシをウぬ者モある時トキを
事名コトナ又代名カクナの省ハけたる者モと知ルるへし
動ウくべき者モを舉アげ示シす又同意ドウイなるもの辭ジ
あり

人が行く

心が答む

思ふの誠なり

聞るの早し

花の散る

教ふるの好き

上下カミシモの間アミダを繋ツぎて相續アツくる者モなり下シモも亦
名詞メイシなり又おのノノも同ドウじまがの辭ジなり

人の子

君の世

鳥の聲

梅の枝

山の上

天の下

富士の山

佐渡の島

露の命

右の外は動詞を名詞として受くる者あり

眠るの後

重まるとの上

多との人

沖つ風天つひ女などのツもあのがよ同じ但

し古言よして今の世よてを限りわりて用ゐら
言葉なり

二 動く様よ就きて其意を示せ

人よ問ふ

書よ記す

山よ登る

國よ歸る

人よ成る

敵よ思ふ

朝アサに聞キき夕ユフに死シす

涼スミみよ行ユき酒サケに酔エふ

學マナぶよ進スみ教ヲシふるよ勤ツトむ

右ミナの外ホカも上カミの装詞カガミ第四種シヨウジの連用言レンジュウゴンと定むる者モノを并ナラせ見ミるへし

ヲ 物事モノコトの仕分シバテきる意イと働ハタくべき處トコロを示シせと

又ヨリの意イなるも何ナニも下シタに接ツくも用言ジュウゴンのみりて形言ケイゴンなり

字ジを寫カクす 近チカくを廻マる

家イヘを出イづ 妻ツマを去サる

路ミチを行ユく 門モンを閉トづ

ト 抑オサへて定サむる意イりて名詞メイジを受ウく動詞ドウジハ既スデに云イひ切キりたる言葉コトバを受ウけて下シモの意イを起オす

す者なり又二つ並べて云ふ時用ゆるこ
とあり

英雄エイユウと稱シヨウす 神カミと祭マツる

花ハナと見ミる 露ツユと消キゆ

悟サトると知シれ 無ナしと答コタふ

斯カクと告ツぐ 然シカと定サダむ

有アりやと問トふ 我ワレをと思オモふ

月ツキと花ハナと 内ウチと外ソトと

向ムカふ方カタを指サす俗ゾクヨそニと同トく用ヨゆる

東ヒガシへ向ムく 右ミギへ長ナガし

ヨリ 物事モノゴトの兩フタツへ亘ワタり移ウツる意イの時トキも下シモマテの
言葉コトバらる者モノなり 縦タトヒ令トビなき時トキも其意ミコトバを合アハめ

り又比へで料を定むる意なり限れる意なり

東より西まで

彼より来る

素より知る

海より深し

我より外ならず

門より入れず

カラ 上のヨリと同じ

此より夫まで

外より聞え

心より出づ

今日より改む

マデ 其處よ至り及ぶの意なり上より云ふ如くヨリと相向ふ者なり

家まで歸る

人まで惱す

斯まで思ふ

此まで來れ

○第二種

六の種の辭を総べての物事を指し示す者なりガ、ノ、トモ、バ、ド、ドモの外に辭同志結び付きて様々の意味を示せり物事の差別を付くる者なり但しヨと結び付きたる時を濁音となれども第三種のバとて其意味大に異なり者なり

山を青く水は緑なり 人を云ふとも我が云ふな

七

兩以上の者を並べて指す者よりして上下兩處に置く者なり又一處に置ても其意をゆる

月も花も

誰もも彼もも

ゾ

多くの中より一つ取り出して指す意なり

心を尊ま

然ぞ思ふ

見てぞ定む ミ サガ 是をぞ取る コレ ト

ナン ナ シ ラ ズ と同じき意にて文章の中よてハ言葉の滑らよなり者なり ナホ フル 尚古くもナモとも用也

君よなん告ぐ キミ ツ 斯よなん謀る カ ハカ

コソ オホ チ ホ ト 多くの中より一つの物を取り出しし慥よこれぞと定むる者なり又願ひの意よ用ひる

人あを見えね ヒト ミ 我あを本人よ ワレ ホシ ニン

知よふを尊れ シ タ ト 能よふを來れ ヨ キ タ

かゝりなきこそ カ コ 乞ひ願ふよふこそ ネ ガ

ヤ タ ガ 疑ひて問ふ者なりゆれえ下よ用言を置り シ モ ヨ ダ シ ヲ きて其意の足ることゆり但し用言を第一四轉形言を第一轉を受く

花や咲く ハ ナ ハ 行きや為し ユ セ

ありや

なりや

カ

ヤ又同じ蓋指す者ありて疑ふ者なり但用
言く第五轉形言ハ第三轉を受く

誰れのある

我ら汝ら

あるもの

なるもの

ダニ

一つの者を取り出して多くの者の證據と
する意あり

是だもあるよ

さうぬたよ

スラ

ダニよ同じ意よりて尚指す所なり

我ら知らず

サへ

物の上よ又添ふる意なり又スラと同じま
意あり

死ぬとさへ云ふぞ

ノミ

一つありて二つとちよき意なり

君のみ告ぐ

海のみ多し

バカリ

ノミよ似て少し輕き意なり

今日ばよりいふぞ

夫れとばより悟る

○第三種

上よも下よも動詞ばよりを受け接ぎ

テ

る辭にて上の言葉の働きよ因りて受る處異なり又去の種の中なるが、ニ、フの三つも第一種と同じきが如きも其用々様甚と異れり
事の終りたる者を示き用言第二轉と形言第四轉とを受く

知りて云ふ

早くて善し

デ

ズシテの約りたる者にて用言第一轉を受く又俗語もニテの約りなれば名詞より受く

間キのぞカ叶ナえぬ

我ワレでナなシ

何ナニでナある

トモ

抑オスへて他タへ反カへま意イなり用言イも三轉五轉
八轉形言イも一轉三轉四轉共ニ受ク

死シぬモ云イはシ

考カガへモ違チガふ

清キヨしトモ清キヨし

善ヨまシとモ云イへズ

惡アしトモ思オモふ

用言第一轉を受クるも未來ミライの意イにて預め
然シカ成ナるベき意イを示シす又第七轉を受クるも
過タ去クなり

云イはシ知シらん

競クラべモ分ワる

云イはシ悟サトる

競クラぶレも同オトじ

トモニ同じしとして過去の意なり用言第七轉のみを受く

問へど答へず 起られど早し

ドモ ドニ同じし亦第七轉を受く

見れども見えぬ 食へども味知らず

ツ、 脚言たるツツルのツを重ねたる者にして知りつゝも知りつ知りつの畧と心得べし

但し繰り返して彼と此と有様を示す者即ち用言第二轉を受く

歩みつ見る 讀みつ書く

ガ 我思ふ所ニ違ひて其意の裏返りたる意但し過去なり用言第六轉を受く又常ニ脚言たりキシシカのシより受く

尋ねしげ逢はず 問ひけるもの答へず

二

上のガの意も同じく亦受とる言葉も同じ
但し現在よりも過去よりも亘れり

思ふも増したり

行きも歸らざる

おれも上のガニも同じ

考へしを行す

思ふはしを斯をせり

文章篇

文章も我思ふ事を書き綴る者なり即ち文字を
合せて言語となし言語を列ねて文章をなすは
れも種々の言語さへ並べ列ねれど思ひの儘を
書き顯し得べき如くなれども其並べ列ねる次
第も法式の定りられも猥りも書き綴ることの
能くぬ者なり

文章を書かんも先づ三つの言葉の區別を能
く心得かゝしし文字言語の兩篇を能く會得せ
る自然も其法式を悟らばし

言葉の切續

言葉の自他

言葉の係結

右の三區別を違ね、決して文意を誤りて思ひの通ぜぬことゝあらざらん

○言葉の切續

切るゝ言葉と、動詞なる用言第四轉と、形言第一轉とよりて續く言葉と、上より出せる連用言連體言これなり
六の切續を形言にて著しく分ると雖も、用言

よて、甚と混雜し易と、且四段と一音一言との用言の如き、切續共よ同じき様なり
脚言も亦切續のある者、これを、用言形言よ、準へて、其用ゐ様を悟らばし

道を行く 四段

水を流る 二段

顔も似る 一音一言

右に用言第四轉よて云ひ切る言葉なり

行^ユ之道^{ミチ} 四段

流^{ナガ}る^ル水^{ミヅ} 二段

似^ニる^ル顔^{カホ} 一言

右も用言第六轉より名詞に續く即ち連體言なり四段を切し言葉と同じくウ段より直に名詞に續けども二段より更なる文字を加へざれも名詞に續くぬ者なり一音一言を切續共なる文字を加へたり此事既よ言語篇よ其由を云へり

行^{ユキ}道^{ミチ}

流^{ナガレ}水^{ミヅ}

似^ニ顔^{カホ}

右用言第三轉より亦名詞に續きて連體言となすはれども流る水も其有様を云ひ流ると云へども二語相結びて一の言葉の如くなりたり

行^ユき過^スぐ

流^{ナガ}れ環^{マダ}る

似^ニ寄^ヨる

右も用言の第三轉ダイサムテンにして動詞ドウジは續ツクく即ち連ツク用言ヨウゲンなり

山ヤマを高タカし

心ココロも同オナじ

右も形言ケイゲン第一轉ダイイチテンにして云イひ切キる言葉コトバなり

高タカき山ヤマ

同オナじココロき心

右も第三轉ダイサンテンにして即ち連體言レンタイゲンなり

高タカ山ヤマ

同オナじココロ心

右も連體言レンタイゲンなれど上カミの行道流水キョウダウレイスイと同オナじと結ムスひ付ツきて一ヒトツの言葉コトバの如トドくなりたる者モノなり
高タカしモシ文字モジを加クハへビて同オナじココロを加クハふ此事コトも既スデに形言ケイゲンの處トコロより出イせり

高タカく立タつ

同オナじココロと日ヒふ

右も第四轉ダイシテンにして即ち連用言レンヨウゲンなれど下シモも必動詞カネドウジは續ツクくべき理リなるよ又次マタツギの例レイの如トドく用ヨウゆること常ツネに多オホし

高く山が立つ

同じく人が曰ふ

おまゑ山が高く立つ人が同じく曰ふと云ふ
 べきを名詞を中へ置きて斯くの如く用ゐる
 者なりはれど其意を心山と人との名詞は續
 りずして立つ曰ふの動詞は續きたる連用言
 ぢり

○言葉の自他

言葉の自他と云ふ此方の事を語らるるも此方へ用
 ゐるべき言葉を用ゐ彼方の事を謂ふも彼方

は使ふべき言葉を用ゐるを云ふなり

自ら然る言葉も自の言葉にて自ら然するも物

を然するも他は然するも共々他の言葉なり

おの言葉も素より動詞の用言のみよして脚言

の使然言と被然言とを總べての言葉は結び付

きて他の言葉の働きをなさむ者なり

自の四段よして他の二段なる者なり又他の四

段よして自の二段なる者なりおの他を必サ行四

段の働きも限れり又自他共々四段なるも同ト

次は區別して其例を出せり但し小字は記せる

自 四段

退シリツく

伏フす

立タつ

他 二段

退シリツく
退シリツける

伏フす
伏フせる

立タつ
立タてる

並ナラぶ

止トムむ

入イる

並ナラぶ
並ナラへる

止トムむ
止トムめる

入イる
入イれる

右オナと同オナトキ自ツ他タをレどモ少スく其サマ様ヲ異ニす
る者ヲ何レ也

重カサなる

重カサぬ

重カサねる

連ツラなる

自
二段

盡ツく
盡ツまひ

起オく
起オまひ

落オつ
落オちう

連ツラぬ
連ツラねる

他
四段

盡ツす

起オす

落オす

亡ホロぶ
亡ホロびる

癒イゆ
癒イゆる

消キゆ
消キゆる

顯アラハる
顯アラハれる

崩クツる
崩クツれる

亡ホロホす

癒イヤす

消キヤす

顯アラハす

崩クツす

自 四段

及ぶ

通ふ

澄む

富む

他 四段

及す

通す

澄す

富す

○言葉の係結

言葉の係り結びと云文章の上より上より辭の
 係り又因りて下の言葉の結ぶ様を云ふなり
 総べてあの結びと云ふは動詞の云ひ切る言葉
 まで用言を第三轉を結ぶ者と一形言を第一轉
 を結び言葉とす故にあの云ひ切る言葉まで結
 ぶ時を上より辭の係りなるとも素より結び言葉
 となるなり
 はれど上の言葉に疑ふ意なるとヤカの辭より係
 る時とゾノガの如き慥に指し定むる辭ある時

とも常の切る言葉よてを結ぶす却て用言の
 第六轉と形言の第三轉と常よ名詞よ續く言葉
 よて結ぶ者なり
 コソの辭より係る時を更よ用言第七轉よて結
 ひ形言を變格なるアリの用言よ結び付きて一
 變したるケレよて結ぶ者なり
 脚言を即ちおの結びよ最も要用なる者なりは
 れと用言と形言とよ同じき働きの言葉を何れ
 も異なるおとなし但しズ、又、ネ、ト、キ、シ、シカと
 メとマシマ、シカ、との脚言を少しく異なる所あ

り次よ正語俗語を打交つて其例を出す
 用言形言の常の結びを明らなれども尚一例
 づよを出して三種の異同を示まべし

月を洩え行く 今日も雪降る

雁ぞ群れ立つ 誰のおとなふ

雨と云を聞け 今云を語れ

右も四段の用言の結びなり四轉も六轉も共

又同トく、てウ段ヨて切れもし續きめする
おとも用言の處を見合すべし

花を野外尋ぬ 心よ前非を悔ゆ

六の事を誰の止むる 谷川よ水を流る

雲出でて月を隠れ 風誘ひ汐を満つれ

右二段の言葉も三つの結ひ殊よ能く分る

魚を鍋で煮る 好き衣服を着る

舟ぞ洲に居る 世の人に見る

姿おそ君よ能く似れ

右一言の用言も四轉と六轉とを共する文字
を加へ七轉をレなり 扱二音三音を共する上の
二段又同トくフ、フル、フレ、ヌ、ヌル、ヌリ、とク、ク
ル、クレ、ス、スル、スレ、と三つの結びを分る

樂ラシクいよハ苦クりり

論ロンよりシヨウユ證シ據コなり

負マけカチるカチをカチ勝カチちカチなる

鉤ツリア合フをフぬフのフ不フ縁フのフ基フなる

好スまモノくジヤウスつモノをモノ物モノのモノ上モノ手モノなモノれ

油ユ斷ダシをダシ大ダイ敵テキなテキれ

右も四段變格なりアリ用の言にて即ち脚言のセナザタケメモ同じ働きなれむナリの例を記せり

稼セセぐオヒよツ追ヒ付ツとヒ貪ヒ乏ヒなヒる

見ミぬコト事コトをキヨ清キヨまキヨ

良リヤウヤク藥ヤクをクナ口クナにニガ苦ニガ々ニガれ

右も形状言なり以下共よ一例を擧ぐ

論語讀の論語知らず

盲メクラぞ蛇ヘビも惶オぢぬ

井ナカの中の蛙ウハツも大海タイカイを知らぬ

右脚言打消言葉なり

足許アシモトより鳥トリを立タちき

逃ニゲるぞ一イチの手テなりし

人ヒト知シれずこそ思オモひ初ハジめし

右も過去タカの脚言キヤクゴンなり又とツとも二段ニダンも同し

心ココロ立タち寄りて見ミてゆらん

君キミよ對タイして何ナニをの隠カクさん

夫ソれこそ詐イツハりなめ さまをあらめ

右を未來をミライをオシ押量るハカ言葉なりコトバ働き様も四段も
同じ

未イマど花ハナの盛サカりよ逢アハをま

春ハル來クるふとを誰タレの志シらま

年トシ行ユくとたをよそ見ミま

右ホカの外ホカの脚言キョウゴンを皆ミナ此例コノレイも準ナガラつて三ミつの結ムスびを
能ヨと辨ワカふべし

世ヨの歌ウタ讀ヨミ人の諺コトワザよあカの係ケり結ムスびを一言コトよ悟サトら
せ知シらむサムるジ三十一サンジウイチモジ文字モノジあり

ぞらあそれ思オモひまマるやヤとトをヲりやヤらん

これぞいつのむまひをめり歌

ソルコソレとをソと係カるとときえルと結ムスびコソ
と係カるとときえレと結ムスぶを云イふなり又マハリヤラ
ンも同オナじおとマてハと係カれむりと結ムスびヤと係カ
れをランと結ムスぶことなり総スべて歌ウタの結ムスびをか
のセナザタケメを多オホく用モトぬる者モノなれどハリ、ゾ
ル、コソレ、と大丸オホヨリの心得ココロエマて然シカるべき事コトなり

オモヒキヤトハとを上^{カミ}ニ思^{オモ}ひきやといふ疑^{ウタガハシ}を
含^{フク}める言葉^{コトバ}あるときを必^{カナラシク}其^{オノ}下^{シモ}ニトハと云^イふ言
葉^ハを用^{モト}みて上^{カミ}ニ及^{カヘ}る様^{サマ}ニ云^イひ廻^{マシ}す者^{モノ}なり即^{スナハ}ち
か^カく何^{ナニ}らんとも思^{オモ}ひきやと云^イふ意^イを有^アるを
悟^{サト}るへし

小學日本文典卷之下 終

明治十四年二月十八日版權免許
同 年五月刻成發行

著者

東京府平民

大槻修二

淺草區北富阪町二十五番地住

出版人

大阪府平民

柳原喜兵衛

東區北久太郎町四丁目十五番地住

出版人

同

三木美記

同區北久寶寺町四丁目四十四番地住

